

A子の登校拒否

足利市立協和中学校 橋本欣也

1.はじめに

A子の登校拒否は中2になって、はげしくなった。友人が迎えに行っても応ぜず、理由もはっきりいわないで、漠然と一日中、家にとじこもった生活が続いた。

A子の家族構成は父親と妹二人の四人である。幼くして母親を失ったA子は、妹の面倒をみながら家庭の中心となって食事の世話から、父親が早朝、仕事に出かける身じたくまでやらねばならない毎日だった。小学生のうちは、父親のいうままに、朝の3時ごろ起き朝食をつくるという生活が続いたが、中学生になって寝ぼうしたからといって遅刻をくりかえし、とうとう学校ぎらいになってしまった。

2.中学二年次の記録から

(1)一学期

6月1日の担任の記録には、父親は二言めには、「進学しろ。」というが無理である。本人の希望は将来美容関係の仕事をやりたい。……と書いてある。親として子供はかわいい。学校だけは行くんだ。勉強すれば女子高校にもやってやると口ぐせに言っている。

しかし、本人にとっては苦痛なのである。小学生のころは進学のことは何もいわれない、いやなことはなかった。小遣いは十分なだけ与えられた。いつも好きなだけ使えるところにおいてあった。自由気ままに一日をすごしてきた。

妹二人は、養護施設にあずけてある。A子は妹に会いたいのだ。父親に内緒で施設に行っている。上の妹が施設の友を連れ出して逃げ出すということもあった。父親は仕事を休んで施設の先生方と探しに行ったりで、落ちついて仕事もできず、やけになって酒をのみ、大声で学校に電話したり、どなりこむようになってきた。

(2)二学期

- 9月3日、担任と父親の話合いで、
 - ① A子に、妹を施設から家にもどせない理由をはっきり父親から言ってほしい。
 - ② A子にとって、夜、猫とテレビの生活はさびしいから、話す時間をつくってほしい。

以上二点について担任から父親にたのんでいる。

酒がはいらないと子供とも担任や施設の先生とも話しができない父親である。話してはなく罵声であった。

二学期になって、近所のB子が朝迎えに行くと「あんな学校なんか行かなくてよい。」というようになった。しかし、A子は父親のことばをふりきって登校した。このころから父親は学校の悪口を平気でいうようになり、B子が迎えに行ってもどなられることは

しばしばあった。

仕事がない日は朝から酒を飲み話すことが支離滅裂であった。学校はA子のことを面倒みないとか、担任の悪口を電話でいうようなことが続いた。家でも、学校のことや、友人のことでA子と口論となり、「出て行け」「出て行く」で家を飛び出し、もどらないことがあった。酔いがさめると「子供が自転車で出て行ってしまった。どうしたらよいのか」と担任へ電話をして来ることもあった。酒を飲むと大声でどなり散らし、酒がはいらないと話もできないほどの父親であるが、子供のいないさびしさにはたえられないのである。

○ 9月20日夜

担任の家に電話があった。A子の欠席が気にいらないと……いつものようにわめき散らした。とにかく学校へ行っていれば気分がいいのだ。

毎日、近所のB子や友人が迎えに行くが「あとから行くから」と返事だったが学校に来ない日が続いた。夕方、酔って学校に来た父親は、例によって大声で、自分勝手にしゃべりまくるだけだった。酔っている時は全然はなしにならなかった。

○ 9月24日 通学途中からにげ出し行方不明

夕方になって家にもどったと父親から連絡があった。この夜、担任の家庭訪問でわかったことは次のようなことだった。

A子が学校に行かない理由が父親にあったことを全く知らなかつたと父親が深く反省していることだった。酔って学校にどなりこむのがA子にとっては耐えられることだったこと。それからA子もちゃんと学校へ行くという約束をしたこと。

○ 9月28日 泥酔して学校へ来る

父親が学校に来て、職員になぐりかかるような格好をしたので口論となる。

○ 9月30日 友人三人が迎えに行く

素直にA子は登校、午前中、校長室で校長と話しをする。

① 父親が荒れる原因として、A子の登校拒否があること。

② みんなががんばっているのに、おまえにはそれができないこと

などを校長先生が話すと、

△ 家で猫をかわいがっているが、猫が家に来るようになって、変なことばかり起きていること。それで一度捨てたが、またつれてかえったこと。

△ 母親の墓へ行くと心が落ちつき、ほっとすること

など、A子は心を開いてくる。

環境をかえて、時間をかけて、じっくり本人の気持ちを聴いてやることが今のA子にとって最も必要なことであること。父親は、A子が学校へ行けば、落ちついて仕事もでき、A子の進学も可能であろうと期待していること、親子四人が一緒に暮したいといい出したのも12月になってからであった。

(3) 三学期

父親から電話で「妹二人を家へもどせば、A子は学校へ行く。」というのだが、どうかという連絡がくるようになった。

児童相談所に連絡をとり、父親の考えをきいてもらったところ「妹二人を引きとるとこの先心配だが、A子が望んでいるのならそれでもいいでしょう」ということであった。家族四人がようやく生活できるようになったのは三学期になってからだった。

しかし、この生活も長くは続かなかった。父親・養護施設・児童相談所との相談の結果A子を施設に入れることに決めたという電話を担任は受け取った。A子が行くというからすぐに宇都宮にやることになったということだ。全く急な話だった。「父親も不自由だろうが、本人も決心したようだから10日間位ようすをみます。」というはなしだった。A子は中央児童相談所の世話をすることになった。間もなくして養護施設より妹二人を引きとり三人の生活がはじまったが、A子がいなくなつてから父親はほとんど働かず、妹たちも終日テレビづけになっている日が続いた。

○ A子の日記から

お父さんお元気ですか。私は知っての通り宇都宮の児童相談所にいます。うちにいた時は、自由がきましたが、ここは全くききません。

朝は7時30分に起き、夜は9時にねてしまいます。……………土曜日、校長先生が来てくれました。先生としては、〇〇中学校で卒業させたいようです。私もできることならそうしたいのです。

お父さんが休まず仕事をちゃんとして、お酒も体によくないし、ほどほどにしてくれのなら、私もがまんします。本当は電話したいけど、…できないので、ゴメンなさい。また書きます。体には気をつけて……さようなら 胃がわるいのだから早くなおして！

施設の生活日記には、家族四人で生活できるのはうれしいが、私は学校を休まず行く自信もないし妹と一緒に休んでいるのでは困るから、ここにいた方がいい……と書いてある。また、お父さんが、休まずに仕事をしてくれれば……それでいい……と書いてある。

3. 中学三年になったA子

(1) 一学期

A子はU町の養護園で生活することになった。養護園からU中学校へ進学することになった。はじめのうちは、落ちついていたが、いつか番長格になり友人を誘って外泊したり、2～3日養護園にもどらないことを繰り返すようになった。

そのころ、東京方面で知り合った男友だちや友だちと生活をしているらしいという情報を得て捜して出かけたが見つからなかった。養護園の先生方からもう手に負えないから引きとってほしいというほどにA子はなってしまっていた。

(2) 二 学 期

11月中旬に数人で養護園を逃げ出し、行方不明になってから約1か月後、A子が一人実家にもどったのは12月5日であった。やはり、自分の家が一番よいところだったのだろう。家庭の温さがこいしくなり、父親と妹と一緒に生活をなによりも望んでいたのだろう。

中学校だけは卒業したい。自分が通学した学校の卒業証書をもらいたいという願望とB子の支えがほしかったのである。

人が全くかわった父親の変容もみのがせないことだ。本当の父親の姿になったのだ。時折あきらめた口ぶりで「おれがわるかったんだ、酒がわるかったんだ。」と、そのうらにはA子と一緒に生活できる安堵感がひしひしと感じられるのである。

学校へ来るようになんでも気が向いた学科以外は授業に出ないが、保健室で養護の先生と友人と明るく笑いながら、これから希望を話す姿には、バーマをかけマニキュアをつけた荒れた生活は全く想像できないのである。

4. お わ り に

本人の変容の要因は、学級担任の態度、学級全体のA子への思いやり、それに家族が一緒に生活できるようになったことがあげられる。

家出したA子を父親と一緒に捜して歩いた学校側の態度は、学校に対する信頼というつよい絆となってかえってきた。酒の量も減り仕事に精を出しA子を中心によく歯車が動きはじめた時、久し振りに親子が味わった家庭の味は、温かいものだったはずだ。

友人S子の存在も大きい。なんでも相談できる友だち。嘘と知りながら、だまされているとわかっているながらA子の話しを聞いてやった学級担任、しかしながら廊下を土足で歩いた時にはきびしく注意した態度、家庭で母親役として一家の中心となり卒業後はパートで働くことに目標をもちはじめたことは、学校でみんなと一緒に生活するよろこびとなってあらわれて来た。

U町の施設の指導員が、わざわざ家庭訪問し雪の夜、家族と食事をしながら語り合ったという話を聞いた時、学校の指導がまだまだ不十分だったことに気がついた。